

海外のヘルスコミュニケーション研究の現状

萩原明人¹、濱崎朋子²、前田祐子³、岩隈美穂⁴

1. 九州大学大学院医学研究院医療経営・管理学分野
2. 九州女子大学家政学部栄養学科
3. 京都大学医学研究科人間健康科学系専攻
4. 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻医学コミュニケーション学

抄録

近年、わが国の医学および医療系大学では、医療コミュニケーションに関する研究や教育が活発に行われるようになった。しかしながら、海外の研究状況に関し、個々のテーマではなく、全体的な状況を把握している者は殆どいないと思われる。そこで、分野を医学系、社会医学系およびコミュニケーション学系に大別し、各分野で代表的な専門雑誌を数点選択し、研究をキーワード別に分類し、過去数年間の研究動向を探った。

その結果、医学系分野では、実際の医療現場において重大な Outcome に関連するコミュニケーションについての介入研究、および、医師－患者－介護者、複数医療従事者間といった複数者間のコミュニケーションについて分析、検討が行われていた。社会医学系分野では、社会構造、健康格差、社会的不平等の社会的システム関連、慢性疾患やメンタルヘルス、psychological distress、primary care、医療面接などに関する研究が多く行われていた。更に、集団間・内コミュニケーション、組織コミュニケーションに関する研究が多いが、思考・価値観に関する個人内コミュニケーションの研究は少ないことが示唆された。コミュニケーション学系では、2大コミュニケーションジャーナルにキーワードが記載されていなかったため、Medical Care を使用した (Issue 44~48、2981キーワード)。総括すると疾病そのものというより、ヘルスケア制度関連、医療を経済的視点からみたキーワード、それからクオリティに関してのターム登場が目についた。さらに Handbook of health communication の索引で10行以上の記載があったキーワードに注目したところ、

Medical Care ジャーナルと重なっているキーワード(例えば、Patient、Cancer、AIDS、ナース)も多々見られた一方で、Community (41行)、Communication (25行)、Health communication (34行)は、Medical Care ではほとんど登場していなかった。

キーワード： 海外ヘルスコミュニケーション 医学 社会医学コミュニケーション学

1. はじめに

わが国では、近年、医療コミュニケーション問題への関心が高まり、医療コミュニケーションを専門に扱う講座を設置する大学が増えている。しかし、欧米では、早い時期から、医療のコミュニケーションに関する研究の必要性や重要性が広く認識され、非常に活発に研究や教育が進められている。医学教育の専門雑誌や社会医学系雑誌ではほとんど毎回、総合一般系雑誌や内科系雑誌でも相当頻繁に、医療者と患者のコミュニケーションに関する論文が掲載されている状況である。

教育面においても相当以前から、実践的な試みが活発に行われてきた。医学部でSP(模擬患者)を使った面接技法の向上を目的とした臨床教育が行われ、大きな実績をあげている。公衆衛生大学院や看護学部でも即戦力になりうる医療従事者を養成するため、コース・ワークとフィールド・ワークを組み合わせた、密度の濃い教育が行われている。

本セッションでは、欧米の研究面に着目し、社会医学分野、医学分野、ケア分野における代表的な専門雑誌を取り上げ、そこで見られるコミュニケーション研究を概観することとした。常時、研究者は個別のテ

ーマを追っており、案外、研究全体の動向には疎い。しかし、時として、全体を把握することにより、新たな視点から個々のテーマを見ることが出来る場合もある。その意味で、今回の企画は、欧米の研究動向を把握し、今後を展望するうえで役に立つのではないかと思われる。

2. ジャーナルキーワードに見るヘルスコミュニケーションの動向:医療コミュニケーションに関する文献検討 (JAMA,NEJM,Lancet 誌)

2.1 諸言

欧米の医学系総合雑誌のうち “The Journal of the American Medical Association” (以下 JAMA)、“New England Journal of Medicine” (以下 NEJM)、“The Lancet” (以下 Lancet) 3誌を対象論文とし、医療コミュニケーションに関連する研究の動向をについて検討を行った。期間は2001年から2010年の10年間である。キーワードとして、“Communication”、“Patient”のキーワードでヒットしたもののうち、さらに Abstract を精査し、医療コミュニケーションに関連する文献として適当であると判断した26件を分析対象文献とした。ちなみに、2つのキーワードでヒットした文献がこの期間のすべての原著論文に占める割

合は、JAMA が 0.6%(11/1690)、NEJM が 6.9%(143/2082)、Lancet が 1.6%(28/1742) と非常に低い割合であった。

2.2 結果

全ての文献を対象とし分析を行い、以下のような結果を得た。

(1) 診療科別では、外科が最も多く、次に内科、終末期ホスピスの順で多かった。(2) コミュニケーション当事者の分類を行った結果、医療者一患者間が最も多く、その他、医療従事者間、医療者一家族間、医療者のみ、患者一家族間、医療者一患者一介護者間に分類された。(3) コミュニケーションで扱われた内容は、コミュニケーションスキルや患者または医師教育といったコミュニケーションスキル自体の向上を目的としたものと、治療やケアの1つの手段として、または特殊なコミュニケーション手段を用いた場合のQOLや治療効果、有害事象減少といったものに分類された。(4) コミュニケーション手段としては、話し合いといった口頭によるもの、Webやバーコードなど電子によるもの、チェックリストや、掲示ボード、情報パンフレットといった紙ベースによるもの、および、医学生に対するOSCEなど、特別なコミュニケーションスキル法などがあった。(5) 研究方法については、介入研究が最も多く、次に、前向きコホートが多くみられた。(6) Outcomeとしては、有害事象の有無が最も多く、その他にはコミュニケーションスキル、治療法および手術の選択などの患者意思決定、死亡率や生存率など直接生命に関連するもの、後悔など精神的なQOLに関連するものが指標となっていた。(7) Outcome指標

を生命に直接関わるものを程度大として分類したところ、生命に直接関わらないが医療ミスや症状の悪化など、程度が中等度から大であるものが最も多かった。

つぎに、近年における医療コミュニケーションの研究の特徴を明らかにすることを目的として、年次比較を行った。(1) 2001-2004年では外科の研究が多く、2005年以降では内科、ホスピスおよび複数科にわたるものが多かった。(2) 2001-2004年で取り扱われているコミュニケーションの種類は医療者一患者間がほとんどであったが、2005年以降では医療従事者間、患者一家族間および患者一医療従事者一介護者など多岐にわたっていた。(3) 2005年以降では、複数者間のコミュニケーションについて取り扱っているものがみられた。

(4) 2001-2004年で取り扱われているコミュニケーションの内容は患者教育が多かったが、2005年以降ではQOLなどへの影響などを検討したものが増加していた。(5) コミュニケーションの方法として2005年以降では電子、Webなどが多くなっていた。

(6) 2005年以降では、Outcomeとして、死亡や生存率など生命に関わるものが多かった。

2.3 結論

Lancet, JAMA, NEJMの3誌において、医療コミュニケーションを取り扱った論文について、その研究の動向を検討したところ、近年では、実際の医療現場において重大なOutcomeに関連するコミュニケーションについての介入研究、および、医師一患者一介護者、複数医療従事者間といった複数者

間のコミュニケーションについて分析、検討が行われていた。(文責、濱寄朋子)

3. 欧米の社会医学系専門雑誌に見る医療コミュニケーション研究の現状と展望

3.1 緒言

近年、医療コミュニケーションは、保健分野に必須に要素である。健康増進や疾病予防、公衆衛生や医療サービスの提供の向上、健康やQOL向上のための社会規範の奨励、また、公衆衛生や医療サービスの提供の向上、臨床分野における医療関係者と患者関係での活用、そして医学教育学等における教育関連に活用されている。そこで、今回は欧米の社会医学系専門雑誌に発表される論文を基に、今日の医療コミュニケーション研究の現状を把握し、そこから今後のヘルスコミュニケーションのあり方を考えることにした。

3.2 方法

欧米の社会医学分野における代表的な雑誌である、Patient Education & Counseling と Social Science & Medicine を用いて、近年どのような研究が行われているかを過去3年間の論文のキーワードを参考に動向を探った。

3.3 結果

ヘルスコミュニケーションに関連する研究をキーワード別に分類すると、社会構造、健康格差、社会的不平等の社会的システム関連、慢性疾患やメンタルヘルス、psychological distress、primary care、医療面接などに関する研究に分けられた。また、医療コミュニケーションの研究論文に

おいては、集団間・内コミュニケーション、組織コミュニケーションに関する研究が多いが、思考・価値観に関する個人内コミュニケーションの研究は少ないことが示唆された。すなわち、個人レベルの社会的認知や帰属過程、社会的欲求、対人レベルでの自己開示、自己呈示、説得、対人関係などは多くの研究が進んでいるが、集団レベルでの集団心理、リーダーシップ、社会的促進等のコミュニケーションに関しては、今後の課題である。

3.4 考察

日本だけでなく世界的に現在進行している社会経済格差の拡大は、さまざまな疾病と結びついていること、更に、社会的、心理的ストレスの拡大によりすべての人々の健康に悪影響を及ぼすことが明らかにされている。また primary care の観点から慢性疾患に対する医療面接などの教育のあり方の研究が行われている。社会科学系では医療における研究は個人レベルと対人レベルの研究が多くされているが、それだけでは政策提言を行えない。今後の課題として、公衆衛生政策提言を行っていく中で、社会医学系の研究を軸とし、科学的根拠のある提言を行っていくこととコミュニケーション教育の必要性が示唆されているなど、医療コミュニケーションを通じて、今後どのように研究されていくかが課題である。

4. Medical careに見る医療コミュニケーション研究の現状と展望

4.1 はじめに

最新の情報が循環し、「知」の合意形成が行われ、学問領域の輪郭を形作る磁場で

あるジャーナルが果たす役割は多大であると言える。医学・看護・コミュニケーション学の各研究コミュニティにとっての関心テーマ、そしてこれからの方向性を探る手がかりとして、主要ヘルスコミュニケーションジャーナルのジャーナルキーワードに着目する、というのがパネルの目的であった。その中で、岩隈担当はコミュニケーション学での2大ヘルスジャーナル (Journal of Health Communication と Health Communication) を予定していたが、両雑誌とも「キーワード」をつけておらず、急ぎよ Medical Care を使ったの研究を行った。

4.2 研究方法

4.2-a. Medical care より

2006年～2010年の Medical care (Issue 44~48) に記載されていたキーワードをエクセルシートに抜き出し、頻度を数える。その際、Issue、タイトル、第一オーサーの所属も記録した。

4.2-b. 「参考までに」 : Handbook of health communication

コミュニケーション学よりジャーナルの代わりに代表的著書として、Handbook of health communication (2003年) を取り上げ、索引より10行以上にわたるワードを記載に注目した。ヘルスコミュニケーションは、米国コミュニケーション学の中でも、特に近年伸びているフィールドで、多くの大学でヘルスコミュニケーションを教える際、この本は教科書として採用されており、コミュニケーション学におけるヘルスコミュニケーション分野を総括できる資料といえる。

4.3 結果

4.3-a: Medical care

Issue 44

一番多い頻度は、5回 (Health serves)。それ以外はサービスやアクセスといった言葉が見られた。

Issue 45 (593 キーワード)

メディケア (7回)、マネージドケア (5回)、メディケイド (4回) と前年では見られなかったキーワードが登場した。また、Quality of care (6回)、quality improvement, quality of life (各4回) といった、Quality が入ったキーワードが目立った。

Issue 46 (711 キーワード)

メディケイドが13回 (前年4回)、メディケア、格差、健康保険 (各6回) などが登場した。

Issue 47 (801 キーワード)

メディケアが18回 (前回6回)、そしてコストについてのキーワード、ヘルスケアコスト (9回)、費用対効果 (6回) が初登場した。「クオリティ」に関するタームも頻度が高かった。

Issue 48 (328 キーワード、ただし発表当時)

クオリティが7回登場した。そのほか、quality improvement, quality indicators, quality measurement, quality of care (各2回) が見られた。

4.3-b: Handbook of health communication より

索引で10行以上の記載があったキーワードに注目した結果、Medical Care ジャーナルと重なっているキーワード (例えば、Patient, Cancer, AIDS、ナース) も多々

見られた。一方で、Community（41行）、Communication（25行）、Health communication（34行）は、Medical Careではほとんど登場していなかった（各、4回、6回、0回）。

4.4 考察

Issue 44～48（2981キーワード）を総括すると、疾病そのもの（Depression, diabetes, Chronic disease）のキーワードはあまり多くなく、ヘルスケア制度関連（メディケア、メディケイド、ヘルスサービス、格差、ケアへのアクセス）、医療を経済的視点からみたキーワード（コストがつくもの）、それからクオリティに関してのターム登場が目についた。またメディケア、メディケイドが頻繁に見られるのは、大多数のジャーナルオーサーたちが米国の大学に在籍していることも関連していると思われる。また、2009年にオバマ大統領が誕生するさいの、その選挙戦での争点の一つがヘルスケア改革であり、その関心・期待の高まりが今回取り上げられたジャーナルキーワードにも反映されていた可能性がある。

のが実情である。しかし、これらの分野の知を融合させることが「ヘルスコミュニケーション」という複合領域では必要と考え、代表的な海外ヘルスジャーナルで取り上げられていたテーマの動向を報告した。

5. おわりに：“越境する”ヘルスコミュニケーション

ヘルスコミュニケーションとは、医療、看護、薬学、福祉、コミュニケーションなどの領域にまたがっている、つまり越境している分野だと言える。しかしこれまで、各分野で研究者が行く学会もわけられ投稿するジャーナルも分野によって異なるため、他分野でどのような研究が行われているのかを目にする機会がほとんどなかった